

定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編

第六回 「震災と反戦(2)」

2011年8月23日18:00~19:45

さんだいでディアテーク2F「3がつ11にちをわすれないためにセンター」

門脇 「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編」

の時間です。みなさん、いかがお過ごしですか。私は今、仙台市青葉区定禅寺通り沿いにあるさんだいでディアテーク2階「3がつ11にちをわすれないためにセンター」にきています。そしてもうお馴染みですね、この人

「定禅寺ジャーナル」編集長の鈴木太さんです。

鈴木 こんにちは。「定禅寺ジャーナル」編集長の鈴木太さんです。

門脇 そして私、現代アーティストの門脇篤です。レギュラーの太田一彦さんは今日はお休みです。その代わりにというわけではないのですが、今日はスペシャルゲストとシークレットゲストがやって来ますので、お楽しみに。今週末、たいへんなことがありますね、鈴木さん。

鈴木 たいへんでもないですよ。遅れていた仙台市議選がようやく始まりました。公示前から私のところには各党の候補者、それと個人的にお客さんになってもらっている方が何人かいる関係もありまして、いろんな方がお店(※仙台定禅寺通りと一番町四丁目商店街が交差する路上にある鈴木さんの「ビッグイシュー」販売スペース。

鈴木さんはこれを「店」ととらえ、「ハッピー・パニック仙台四号店」と名づけている)の前で街宣カーを使ったり使わなかったりやっています。ある党は選挙カーを自粛、もしくは個人的に街宣活動から選挙活動自体まで自粛するということも見られます。何人かの候補者の話を聞いて、市議選なのかちよつとわからない感じがしました。市議というのは市の中のことをやるわけで、グローバルとかいう最近流行の馬鹿な言葉は出ませんでしたが、原発うんぬんを全面に出して来る人もいまして、国会議員もしくは県会議員が言う話なんじゃないかなと。市会議員が掲げるマニフェストとすれば、もう少し市にあつたような話を持つて来るべきんじゃないのかと。裏を返せばその人には市議選に出る覚悟が感じられない気がしました。

かつて政治家というのは、自分の命を賭して戦いながら政治をやっている方が多かったです。例えば五・一五事件で暗殺された犬養総理大臣、東京駅で襲撃された濱口雄幸、斎藤実(まこと)、極東軍事裁判で、文官で唯一死刑になった広田弘毅さんなど。かつて政治家というのは生死を賭けた職務だったなと思うのに比べ、今の政治家というのはあまりにも存在が軽くなってしまっていると思います。命を賭ける賭けないというところまで言うのはどうかという気もしますが、本当にこの人に任せていいのかなどという感じがします。仙台に限らず全国的に衆議院選挙や参議院選挙など見ても、候補者うんぬんというよりも、有権者がよくなってきているという感

じもします。政治家を育てるのは有権者である国民です。国民がよくなければいい政治家が生まれるわけではないというのが私の考えです。ろくな政治家がいらないという中で、今の国民自体も質がよくなってきているのではと思います。

門脇 そのへんの話は「デイバート編」第三回の「震災と祭り」で話したことに通じるものがありますね。もともと政治はまつりごととも言います。いい加減な祭りをやる主催者に対し、それと争うかのように観客の方もひどいマナーで応じるといふ負のスパイラルが見られましたけれども、それが政治にも見られると。

鈴木 もうひとつつけ加えますと、(仙台市青葉区)19人の候補者の中で7人ほどの候補者のポスターに「ノ一選挙カー」というステッカーが貼られています。そのうち6人が明らかに違反をしています。何も重箱の隅をつつくようなことを言っているわけではなく、嘘をつこうが何をしようがまともな政治をやってくれれば構わないと思うんです。その6人は知り合いなので「選挙カー出さないと言っていたけど出てたね」と言ったら、「選挙カーでなく自家用車を出した」などと屁理屈を言ったので「あなたには入れないから」と言つて来ました。ただその6人が6人とも全部駄目かというところではなく、本当にとことん身体張つてやっている人もいます。具体的に誰がどうだというのは今は言いませんが、門脇 鈴木さんと話をしているのは、仙台に住みながら全然仙台のことを知らない。仙台に愛情を持ってない。

市議選にも興味がない。今週末選挙ですが、いまだ誰が候補者なのかも——いつものことですが——知らないんですね。

ひとつは投票してどうなるんだろうという気持ちがあります。それは自分が住んでいるまちというのは、たまに住んでいるというだけの話で、好きで住んでいるわけではないし、一生住みつづけるかもわからない。例えば自分ひとりがごみを拾ったからといってまちがよくなるわけでもない。選挙で言えば自分の一票で何が変わるのか、という意識です。

その一方で、自分の一票で何かが変わるわけではなくても、きちんと見て選ぶということ、あるいはごみ拾いで言えば自分ひとりが拾ったぐらいでまちはきれいに変わらないわけですが、そうしたことを通じて自分の住むまちの市政やまちづくりに参加するということが大事だとも思います。

実は、このふたつが私の中に混在しています。混在じゃないですね。私の場合、自分のまちだともすごく関心が薄れるんです。逆にひとのまちのことだときちんとリサーチしたり、何かが変わるとか変わらなとか結果だけ見るのではなく、参加するというプロセスが大事ですとか偉そうなことを言うわけです。これは私の特殊事情なのか、私のような人間が仙台には多いのか…。

鈴木 仙台に限らず宮城の人っていうのは、県知事の本間さんが捕まったりとか、市長も何人か捕まりましたね。そうした駄目な人を選び続けてきたという悪い「ノウハ

ウ」があります。それを反面教師にして選挙にうまくもっていけばいいのにと 생각합니다。もしかしたら仙台の私たちは人を見る目がないのかもしれないですね。しかし全国の国会議員を見てもまともだと思える人は少ないです。だから仙台・宮城に限らず全国的に人を見る目がなくなつて来ているのかもしれない。門脇さんが今言われた「自分が入れたくらいでどうなるんだ」ということに関しては、私もそう考えてしまいたい時はあるんですよ。でも「ローマは一日にして成らず」という言葉もあるし、その政治家を生かすも殺すもその一票というのか。「私くらい」という人が何万人も出て来たらどうなってしまうのか。

門脇 今日のテーマは「震災と反戦」の二回目ですが、民主主義が全体主義を生んだとも言えるわけですよ。鈴木 全体主義と民主主義は表裏一体なんです。ヒトラーも多数決で選ばれてああいふ状態になったわけですよ。スターリンや毛沢東にしてもそうなんです。じゃあスターリンや毛沢東は民主主義かと言ったら違うじゃないですか。

門脇 民主主義の結果生まれて来た、「違うもの」なんですよね。

鈴木 北朝鮮の場合は正式名称が朝鮮人民民主主義共和国です。民主主義とうたっていて民主主義じゃないんですよ。あれこそが門脇さんのお話を表したもののんじゃないでしょうか。

門脇 最初、民主主義を目指していたものが、出口とし

ては強いリーダーに全部任せてしまおうと、民主主義が民主主義を屈辱してしまった。自分たちですべてを決めていく喜ばしいもの、権利として始まるわけですが、だんだんにそうでなくなっていく。例えばアフガニスタンのこどもの多くは働かされているので学校に行きたいわけですよ。ところが日本のこどもにも学校に行きたいと聞くと「行きたくない」という答えが多いように思えます。それに似ているかもしれない…。

(スペシャルゲスト渡辺さん登場)

門脇 ここでスペシャルゲストをご紹介します。渡辺 渡辺裕一さんです。

渡辺 あ、どうも。こんにちは。

門脇 渡辺さんは、実はこの中継で初めてのリアルゲストです。渡辺さんは「地球対話ラボ」ということでどのような活動をされているんですか。

渡辺 「地球対話ラボ」というのはNPO法人なんです。が、十年前からやっています。十年前にアフガニスタンと日本の高校生の間でテレビ電話対話をするという活動からスタートして今に至っています。

門脇 先日、私は東京大田区で行われた「地球対話ラボ」とさんと横浜の「アート・ラボ・オーバ」さんの企画による「じぶんのセカイをえいぞうにして世界とつながろう」に参加しました。大田区は外国人の方も多く、ボランティアにもいるいるな国の方が来ていましたが、地域のこどもたちがiPodを使い、スカイプ経由で会場に送って来るレポートをUstreamに流すという

企画でしたね。十数名のこどもたちが大田区の自分たちの気になる場所をレポートし、全世界に発信する中で、台湾の方からレスポンスがあつて、対話も行われました。渡辺 基本的に対話というのがベースで、一方的に生中継というのはちよつとあれなんですけど。

門脇 この「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編」も対話というのは大事にしたいと思つているんですが、なかなかゲストや参加者がおらず、最初スカイプによるゲストという試みをやつてみたんですが、なかなかうまくいかないんですね。ネットを中継して対話をしようとする温度差というか、空気感のようなものが伝わらず、うまく対話が成立しない。鈴木さんはツイッターやネット関係には不信感を持っています。

鈴木 いや、不信感じゃなくて、嫌いです。はつきり言つて廃止した方がいいと思つてます。医療とかどうしてもネットじゃないと駄目なことだったら使わなければならぬ部分があるんですけども、使わなくてもいい部分まで使い過ぎてしまつていくというか。そのせいで思わぬ病気を引き起こしています。ネット、パソコン、携帯電話と鬱の関連性というレポートを今書いています。近いうちどこかで発表するつもりでいます。ネットや携帯というのは一利あるも百害どころか万害くらいあると思います。人間関係もそうですし、人間が人間らしくなくなつてきている要因のひとつだと思います。私が総理大臣になったらNTTのiモードを開発した人を市中引き回しの上打ち首獄門にしたいくらい腹

が立っています。

門脇 というのが鈴木さんのお立場です。今日のテーマである「震災と反戦」ということでも情報というのが重要なものだと思うんですね。震災で言えば情報がないことで逃げ遅れたり、あるいは戦争で言えば情報管制操作によつて戦争へと突き進んだというところもあるのではないか。その一方でネットを介することで今回のチュニアやエジプト、リビアにおける革命のようなものが起こりえたという面もある。ネットや情報についていかがお考えですか。

渡辺 情報はやはり重要ですよ。だけれどそれは何もネットでなくてもいいわけです。BS11というデジタルBSのチャンネルで毎週火曜日の22時45分くらいから「いま私たち市民にできること」という市民参加の放送というのをやっています。震災を支援する団体が情報発信をしたりという放送なのですが、その取材で今回、石巻と南相馬に行つて、今帰つて来たところです。その放送は4月から毎週やっていますけれど、手話を必ずつけるんです。字幕もつけます。なぜ両方つけるかを説明すると長くなるのでそれは置いておきますが、今回放送をやるにあつてキャスターの方にも聾啞者の方に登場していただいてやつたりしています。聞こえない人たちの世界は親しく接するまで全然知らず、自分の不勉強がわかつたのですが、その中で、今回の震災の話で言うと聞こえない人はいへんな状況に置かれたそうです。音で警報を出したりするので聞こえない人は何が

起きているのか全くわからない。そのために逃げ遅れて亡くなったという話も聞きました。いろいろな情報がテレビなどで流れているわけですが、これも聞こえない人にとっては――字幕も一部入つているところはありますけれど――たいへんな状況だったと。聞こえない人のための情報を何とかしたいということで、「DNN」というウェブベースの活動をしている団体がいるんですが、手話でニュースなどの情報を震災直後から聞こえない人向けに発信するという活動を今でもやっています。そういうものはウェブで発信されるとても重要な情報であり、必要とする人もたくさんいると思います。しかしそうした情報がある一方で、おっしゃる通りいろんな情報が流れていて、いかがなものかというものもあるわけで、そういうものを浴びていたらどうなっちゃうんだろうということはあるわけです。

鈴木 情報が玉石混交どころじゃなかったんじゃないかなと。金がなくなつてしまつた金山から金を取るくらいひどいものが多かつたと思います。全否定しているわけではないです。必要悪として認めています。でも必要悪なんです。自分の生活ではいっさい使いませんが、それでずっと生きてきているわけです。使わなければ駄目な人たちも存在します。僻地医療で医師との間での遠隔医療であるとか、そういうものに関してはネットは必要だと思いますが、使わなくていいのに使っている人があまりにも多過ぎるように思います。これだけ国土が狭いの馬鹿みたいに車を売っちゃつたというのと似て

います。「みんな持つてるから」という感覚が本当にこの国には多いなという感じがします。東ヨーロッパあたりではネット、携帯がなくて生活している人はいっぱいいますし、アフリカにしてもケニアのナイロビなど大都会は別として、有史以前の生活をしている人がたくさん

います。でもそれなりにやれているわけですね。文明が進んでいるから幸せだ、進んでないから不幸せだという感じではないと思います。例えば「三丁目の夕日」という映画が出た時に、懐かしいなと感じた人がいっぱいいたと思うんです。というのは、不便は不便だけど、不便なりによかったということをや映画の中で描いていると思うんですね。あの当時濃密だったはずの人間関係が今チャットかよ、ツイートかよと。顔が見えない人間なのかアンドロイドなのかよくわからないものを相手にしているような感じばかりが増えてきています。ツイートとか言われて毎回見るんですが、自分ではピンとも来ないし、だからひとりでも多く来てほしいなと思っ

ているんですが。私は正直、この番組の中で好き好んで悪役を演じさせてもらっています。刺されてもいいくらいこのことを毎回言うんですよ。でも反応がほとんど来ないし…。

渡辺 もつと過激に言わないと。

鈴木 でもそうやってしまうとちよつと違うのかなと。

門脇 ひとつはこの場の作り方が間違っている可能性がありますよね。人が来やすいのかどうか。例えばごみ拾いをみんなでやるとういう時、楽しそうにやると参加

しやすいでしょうし、厳しそうなら参加しにくいかもしれない。もうひとつは、もともとこういう場が求められていないという可能性です。そういう場合は嫌だとか…。

鈴木 うざいとか。

門脇 うざいというより怖いというか。

鈴木 あとはめんどくさいというのが一番多いと思います。十代二十代でも三日くらい死ねんじやないかという感じがしてふらふらしながら歩いている連中が多いんですよ。健康がどうという感じではないです。何かわからないけど元気がないし、疲れているのかというところ「かったるい」「だるい」「めんどくさい」——「ビッグイシュー」の売り場に立っているとそういうものを感じます。反対に五十代以後が非常に元気です。ということはあと何十年かたつて今の五十代がみんななくなつた後、若年性老人とかいうわけのわからない病気が増えちゃつて、平均寿命が三十を割つちやつたりするのかなと考えたりするんですよ。

門脇 私もこどもに教えていると「めんどくさい」という言葉はよく出て来ます(※門脇は仙台で癒し系学習塾を開いている)。ひとつは自分がチャレンジできるもの以上のことを常に与えられ続けて無気力になつてしまひ、「どうせやつても無駄でしょう」という意味での「めんどくさい」という子がいます。犠牲者ですよ。そうじゃない子もいます。非常に元気な子で、例えば本を読むのがめんどくさいと言います。ゲームや漫画の方が楽しいという話なんです、それは漫画で済ますことができ

るものなのになぜ本を読まなきゃいけないんだという発想なんです。小説が映画化されていたりするので、映画で見たからいいという話になる。それは違うんじゃないかと言つてもなかなか伝わらない。これは先にあげた無気力感とは違うめんどくささですね。こちらは鈴木さんの言う情報過多による犠牲者かもしれません。

鈴木 うちにも「疲れた」「だるい」「めんどくさい」というタイプの若者がけつこう来るんですけども、話を聞いていくうちに小さい頃の話になると、家事を手伝った経験がほとんどない。結局、ずーっと何にもしないで来てるんですよ。何にもしないで来て、学生時代はあと一年半という時、その先のことを考えたら、何でも自分でやらないといけなくなるはずなんです、社会に出て行くのめんどくさいと。あんまりたわけたことを言うやつは、正座させて二時間くらい説教します。

門脇 売り場で。

鈴木 そうです。そういう連中はまた来るのもいます。来ないのはもう二度と来ません。でも来ない連中は私は追つたりしないんですよ。それほど私の人生の残り時間があるとは考えられないので。去る者追わずでいいのかなと。

門脇 もう一度来る子たちは、こうした場を求めているかもしれないですね。

会場A(女性) 今の若いお母さんたちは、本を読んであげるとか、いっしょになつて遊ぶとかいうのではなくて、子供を生んでもずつとずつと自分が一番なんです

ね。私たちの世代というのは子供が生まれたら子供が一番というような環境の中で育ちました。今のお母さんがたはゲームをやったり自分の時間を大切に。子供といつしよに何かをして楽しむということがないし、ほめるということがないんじゃないかな。できて当たり前何かひとつできたなら「よかったね」のひと言が今の若いお母さんたちからは出て来ないんじゃないかなと思うんですよね。

鈴木 任せきりなんですよ、何でも。学校に任せっきり、学童保育に任せっきり、塾に任せっきり。それで何かがあるとすぐ文句を言う。モンスターペアレントというのは昔もなくはなかったんでしょうけれど、自分勝手な人が増えたのかな。任せっきりをされてしまった子供って、「この親ってなんなのや」と疑問に感じると思うんですよ。疑問どころか「あの人は」という言い方をする子がいいます。「親」って言わないんですよ。親を尊敬できないような構図になってしまっているとか。テレビのCMなんかでもお父さんをないがしろにするようなものが出て来たり、お母さんが子供の前でお父さんの悪口をじゃんじゃん言っちゃったりとか。お母さんといつしよにいる時間が多い子供がマインド・コントロールを受けてしまって「うちのおやじ能無し」。悪口を言っているこのお母さんも尊敬できない。親子関係だけでなく、いろんなところで真綿で首を絞めるようなことになっちゃってる。おかしな殺人事件が増えているというのはそういうところもあるんじゃないかなと感じていま

す。私は4つの時から仕事を与えられていました。たいへんでした。井戸まで水を汲みにいったりとか。原始時代に近い生活をしている山形の山だったものですから。お使いも3キロくらい離れたところであつたりとか。でもお使いをやると、お使い先からお駄賃をもらって、帰って来ると「よくやった。おまえだから頼んだんだ」とたいへんなんだけど、家族の一員だと感じる、そういうものがあつたんですよね。そういうことがあつたので私の子供二人にはちよこちよこ頼んだり、自分が料理を作る時にはいつしよに作ったりして、いい悪いをはつきり言っていたりしたんですよ。そうすると話せる会話も増えて来ます。会話がなかったというのは、話せるだけのものが何もないんですよ。

テレビが家族ひとりひとりに行き渡るようになって、それぞれが違う番組を見るようになってチャンネル争いがなくなつたんだけど、地デジ化になってまたでかいテレビを家族みんなで集まって見るようになったとか。地デジ化というのも割かし悪いことばかりじゃないのかなという感じもします。人間関係ということをどうのこうのというのなら、まず家族関係からなのかな。うちの「ビッグイシュー」の販売店というのは、一人暮らしもそうですけど、6人暮らしなんだけれど家族で話せる人がいないんだという人がけっこう来いています。正直言うと今営業にならないぐらいそういう人たちがいっぱい来ているんな話をして行きます。すごく落ち込んだ感じで来るのが、二時間くらいしゃべってすっきり

した感じで帰って行って、「あれ、3000円もらつてない」ということがよくあります。金にならないことが多いんですが、そんなことしてまでやらなきゃなんなくなるくらい話せる人がいないのかなとか。ホームレスだった自分の時というのは、コンビニのお姉さん、そしてあんちゃんたちと話せるだけでよかつたし、だから自分が本当の意味で孤独だなと思ったのは寝る時ぐらいいかなという思いがあつたんですけれど、パソコンや携帯に依存というところまでいつちやつてる人たちっていうのは、それしかないのかなという感じが最近しています。それは非常にかわいそうな話んじゃないかな。

渡辺 最近の子供って殴ったり殴られたりということがあんまりないんですよね。先生にげんこつ食らつたりとかがありえない——今、お話を聞いていてそういうことが頭に浮かんできました。

鈴木 殴られた先生って、今でも覚えていますし、みんな交流あるんですよ。一回こういうことがあつたんです。とても殴らないような先生が一回だけ自分を殴つたことがあつたんですが、殴る瞬間涙が見えました。今でもそれを覚えているんですが、昭和54年の6月17日、中学校二年の時です。本当に悪いことやりました。殴られた後に、申し訳なかつた、すまなかつたなと思いましたが、今、学校でそういうことになってしまうとすぐ問題になります。昔は学校で先生にぶん殴られるなんて当たり前だったというのもあるし、ぶん殴り慣れた、ぶん殴られ慣れてたというのもあるし、怪我をしない体罰に

みんな慣れてたところがあります。体罰容認というわけではないです。ただ駄目だという感じにしないで、なぜそうなっちゃったのかをみんなで話し合うとか、そういうものの方がいいのかなと思います。

門脇 「震災と反戦」というテーマで前回からやっていますけれど、鈴木さんの少年時代の話を聞いていて、私の原風景的なものを思い出しました。子供の頃から高校生くらいまでの時というのは、この時期になると「はだしのゲン」などが繰り返し流れ、原爆や終戦のことが今とはちょっと違ったりリアリティで流布されていたというか。その中で「強い日本」とか家父長制、強い組織といったマッチョなものが、戦争を起こしてしまっただつての日本を想起させる、ある意味いけないものと感じていました。例えば今、強いお父さんとそれを支えるお母さんみたいなものが再び見直されているように思うんですが、私が子供の頃に持っていた感覚というのは、それは家父長的、封建的なくみそのものであって、それが日本の起こした戦争と結びついたある意味いけないものとして私の中にあるんですね。家族を守るとか、男は女を守るものだとかいうことに私はすごく違和感を持つて来ました。

鈴木 そうなんですか。

門脇 男性が働いて女性が家にいるべきだとは思わない。でも今振り返るとそうした男女平等がもたらした問題が前面化して来ているのかもしれない。お母さんが家にいないという状態が切れやすい子供を生んでいるの

かもしれない。男女におけるニュートラルで平等な地位というのを進めたためにいろいろな問題が起こっているのかもしれない。でも男は女を助けるとかといった発想は生理的に受け付けません。

鈴木 私、男尊女卑の考えはないです。ですけど、ジェンダー・フリーという考えとは一線を画している部分があります。アメリカ型の生活が浸透して来て、かなり男女同権だという状態ですけども、男性と女性は基本的に違います。違う生き物と言ってもいいくらいです。同じはずがないんですよ。だから男性がやることは男性がやればいいし、女性がやることは女性がやった方がいいと思います。例えばイスラエルの場合、全国に徴兵制があつて女性兵士もいます。それがドンパチャっているのを見ると非常に違和感があります。「バイオハザード」とは違うんですよ。現実にはドンパチャつて首が飛んだりしているわけです。アメリカなどにしてもそうですが、女性警官が多くて、それでいろんな危険な目にあつたりしています。少年課という場合でしたら当然少女の保護などもありますから女性警官が必要な部分もあります。ですがそこまで危険なところに体力的に劣る女性を勤務・任務させるのはどうかなと思います。男女同権ということでアメリカではレディ・ウアーストだという考え方がありますが、その反面、日本以上にドメスティック・バイオレンスや男性からの暴力が多く、ニュー・ヨークの地下鉄などに乗るとDVにあつた女性の写真などが平気で貼つてあるんですよ。だからこうい

う国で女性にやさしくとか言つても裏の部分、本音と建前がアメリカにしてもあるなという気がします。アメリカ型になつてから、日本でも今まであまり表面的に出て来なかつたDVがものすごく増えています。「ビッグイシュー」でも55号で「DVからの脱出」という特集があつたりします。DVに関しては何でもDVとかセクハラとか敏感過ぎるのも問題あると思います。その民族にはその民族にあつた暮らしというのがあつただけで、それを変えてしまったというか。だからアメリカから文化的侵略を受けてしまったと考えています。エスキモーが文化的侵略を受けた結果、アル中が増えたんですつまり、いいこともあつたかもしれないけれども、悪いこともけっこういっぱいあつたのかなと。

門脇 例えばその男女同権と同様に、世界にはいろんな地域や民族があつてそこにはそれぞれの民族性、地域性があるんだという考えにも生理的に受け付けないところがあります。エスキモーがコーラを飲んだり、アフリカ人がiPodを持つたりというのも、彼らだつて望んでいるんじゃないか。望むなら手に入れる権利があるんじゃないかと思うんですよ。逆にエスキモーはエスキモーらしい暮らしをしなきゃいけないんだというのは、外からの押し付け、思い込みじゃないか。ある程度どんな地域、民族だろうとアメリカ人みたいな暮らしがしたいんじゃないか。それが本当にいいかどうかはやってみないとわからないし、やってみた結果が今のグローバル化で、あんまりよくなかつたとは思ひ、うち

の妻も怒ってますけど。

渡辺 何をしたんですか。

門脇 男らしくないわよと。戦後、鈴木さんの言葉で言えば「アメリカ化」された状態、同権化が進み、ニュートラルな状態、つまり地域性とカ女性性——アラブ人にはアラブ人の本質があり、女性には女性という本質がある——というのは「神話」なんじゃないか。そんなものはなくて、アラブ人がアメリカ人として育てられればアメリカ人になるじゃないか。だとすればそれはたまたま偶然の産物で入れ替え可能なんじゃないか。だいたいそんな風に思ってたんですね。ただそういう感覚を持っているんですが、アートのではその地域地域の特殊性や地域資源など地域性を読み込んだ取り組みを行っているんです。持っている感覚と実際にやっていることにものすごい乖離があります。

鈴木 アメリカはフィリップ・モリスに対してタバコを吸わない人から莫大な損害賠償というような話がある国なので、マクドナルドとかアメリカから来たジャンク・フードのお店に日本国自体が損害賠償を訴えてもいいのかなと思います。ジャンク・フードがなかった時期には、メタボもそうですが糖尿病もこんなに多くなかったんですよ。マクドナルドの第一号店が出来たのが1971年ですが、そのあたりから比べるとんでもないくらい増えています。潜在的な人を含めれば1500万人くらいいるんじゃないかと言われますが、昔はこんなに多くありませんでした。ジャンク・フード、ファスト・

フードなどは日本にはなく、自分たちが作ったものを自分たちで食べてという生活をしていました。そうした時期にも糖尿病はなかったのですが、村で一番の豪商ぐらいいかならなかった病気が今、小学生でもなってしまう。喫煙によつて肺がんになったのを害毒ととらえるのなら、メタボもそうなのかなと。メタボという言葉もアメリカから来ているんですよ。あの人たちというのは、自分たちでえさをまいておきながら、何かあると「実はこういうのがあるんだ」とか言つて後出しじゃんけんをしたりと、文化的侵略以上、殲滅でもしようとしているんじゃないかというくらい私頭にきています。な

くてもいいものがあまりにも多過ぎるということですよ。この間は駅弁の話が出ましたけれども（※第四回「震災と祭り」参照）、デイズニーランドなんて浦安になくてもいいと思います。あんなもの即刻叩き潰しちゃつて、アメリカだけでいいと思うんですよ。マクドナルドも東京に一店舗あるくらいでいいと思います。看板を見るたびに誰もいなければ蹴っ飛ばしてやりたくなくなるくらい頭に来ているところがあります。どこに行つても買える、食べられるという考えは、野菜に旬がなくなったという感覚に似ています。便利になったということもあります。その反面わくわく感がなくなっていくというか。人間関係もあるのかわからないのかわらなくなつてきてるし。だから精神病なんかも増えて来るのかなと。

太平洋戦争が起こつた理由のひとつに、ドンパチやりた人たちというのが、自分たちではドンパチやらない人

たちだったんですよ。そういう人たちが自分たちで抑えられなくなつちやつて「じゃあやつちやおうか」と。その時に実は東条英機なんかは反対しているんです。戦争は無理だろうと。山本五十六も天皇から「戦争どれくらいできる」と聞かれて「最初の一年くらいならなんとか」と言つて勝つとも負けるとも言わなかったんですよ。全然自分で戦地にも行かない人間がわーつとやつちやつて、全然関係なかった学校の先生、職人、いろんな人たちが死んでます。さつき政治のことを言ったのは、政治家が道を誤つたら戦争になつちやうんですよ。その政治台市民です。それに対して関心を持ってないというのなら、その後何をやらせても文句言えないと思うんですよ。な

んでもいいつていうんなら、ツイッターやネットの後からガタガタ言うんじゃないかというんですよ。そんなの卑怯だと思えます。本当に腹が立つ。奥山さん（※現仙台市長）にしてもよくやつていると思うんですよ。あんまり能力ないと思えますけど。ないならなりにけつこうやつてると思う。あの人だつてたぶん味方がいないんじゃないかと思えます。あの人のような役割をツイー

トとかでほえている連中がやれるかといえやれない。やれない人間があだこうだ言わない方がいいと思う。

門脇 ネットが有効なアドバイスや意見交換ではなく、中傷にしか使われていないと。
鈴木 「2ちゃんねる」の西村なんて即刻死刑にすべきだと思ふ。結局海外に逃げちゃつたでしょう。自分に責

任はないなんて言ってるくらいだから。「死刑」なんて軽々しく言う自分もどうかと思うけれども、言葉で人って簡単に殺せるんですよ。だから「復興支援アートミーティング」(※2011年7月29日、仙台長町で行われたシンポジウム。村上タカシ氏がコーディネートし、森美術館の南条館長や宮城県内の美術関係者などがアートによる復興支援の可能性について考えた)で「言葉よりアート」と発言しましたが、言葉のようなメッセージ性の強いものは危険だと考えています。「ビッグイシュー」でも「共に生きよう」というスローガンを出しちゃっていますけれど、スローガンなんていらなと思います(※震災直後に仙台を訪れた「ビッグイシュージャパン」代表の佐野章二氏は「がんばろう」は危険だとの見解を伝えた。ところがこれが「ビッグイシュー」編集部を持ち帰られると、「がんばろう」と言う代わりに「共に生きよう」と言おうというキャンペーンにすり返られてしまい、現在も展開中である)。

スポーツの世界では、勝者が敗者に対して黙って握手したりハグしたりするケースというのが多いです。なぜかという、察するんです。自分にも負けた経験があるし。言葉なんて必要ないです。負けた人たちや何かあった人たちには何言っても駄目なんですよ。「がんばろう」なんかもそうだし——「がんばろう」って、何回も言いますけれど、神戸の震災だってまだ完全に復興しているわけじゃないんですよ、二十年近くたっていて。ということとはそれよりも規模の大きい今回の震災で、いったい何

年がんばればいいんですか。がんばれる人はがんばればいいし、がんばれない人はもうちょっとゆっくりすればいいんですよ。

門脇 選挙にせよ、震災にせよ、我々は情報を通じて何かを知り、判断していくわけですが、渡辺さんは「パブリック・アクセス」という取り組みをされているんですよ。これは何なんですか。

渡辺 難しく考えなくて自分で発信することです。

門脇 アメリカにはそうした法律があるとか。市民が発信する枠が必ず何%か設けなければならない。これには何か歴史的経緯があるのですか。

渡辺 マスメディアは一部の人たちが独占していて、多数意見しか流れないという事実があります。それを改善し、少数の人の意見がなるべく反映されるように、情報を出す機会を保障しようというもので、基本的にはテレビだろうとラジオだろうとメディアにはそうしたものがあるべきだと思っただけで、ウェブは逆転していて、ある意味誰でもアクセスし、発信できるわけですよ。自分で発信するということは、発信したいことがあるとして、それを発信したらそれに責任をとらなくちゃいけないんですね。それはとてもめんどくさいしいんです。パブリック・アクセスでどうぞと言ってもなかなかそこまで大勢の人が参加するところにはいかなかったり、あるいはいろんな人がただ勝手なものを作るだけで、できたもの、発信する情報が受け取る側にとつてつ

まんなかったりするということもあります。

門脇 マスコミの方はそれなりにうまいわけですよ、発信の仕方が。

渡辺 型があるんです。例えばテレビのニュースで3分間で何かを伝える時、型にはめて流すと楽なわけですよ。それは見る側にとつても安心して見れるし、最低限の情報が伝わるし、大量生産の製品みたいなもんですよ。門脇 子供の頃にテレビばかり見ると頭が悪くなると言われましたけれど…。

渡辺 言われましたね。最近言わないけど。

門脇 テレビからネットやゲームに矛先がかわったんでしょうか。ところで、先ほど渡辺さんから紹介のあったBS11「いま私たち市民にできること」で、私も一本取材をしたんですが、間に入っていた横浜のアーティストユニット「アート・ラボ・オーバ」さんから「マスコミじゃない視点で取材してほしい」と言われて、最初は無理なんじゃないかと思いました。というのはその時テレビをつけると、被災地の現状を報じるニュースはもろろん、避難所のひとりひとりにはりついて5分間くらいしていました。被災地についてもうこれ流すものがあるのかというくらいの情報が流れていたんですよ。これに何か付け加える意味があるのかと。だから情報を扱う難しさを痛感するとともに、何もできないと無力感を感じました。これは基本的には今も続いています。

鈴木 マスコミ目線じゃない目線で、ということですよ

と、取材される側は構えちゃうんですね。これは自分も避難所ですいぶん言われたんです。口調が変わるんです、取材される側が。例えば標準語みたいな風になっちゃうとか。普段の言葉にならない。ところがジャーナリストではない自分には普段の言葉で話しかけてきます。「あいなのとよ、構えちゃうんだ」とかいう話だったので、確かにそうだなと。

門脇 取材される人自身も相手のために言っただけのこと言ってしまうんですね。

渡辺 ありますね。

鈴木 予定調和というか、注文相撲と言ったらおかしいんですけど、そういう構図で切り取られちゃうというか。だからテレビの取材などは、現地に行つてとりあえず話は聞いているんだけど生々しさが少ないなど。一流レストランでソムリエとかがいきなりペプシコーラとか持つて来たとか、そんな感じでしょうかね。

門脇 わかります。アートのでも何か見たことあるなどというものと、ものすごく生っぽいものがあるんですよ。見たことあるなどは型を意識しているというか、ある種のノウハウの上で見せてるんですね。それに対して「出しちゃった」みたいなものが面白いんですけど、ある意味安心して見られるものではないので難しいといえ難い。それはアートに限らず、報道や政治、教育などにも言えるのかもしれないですね。

鈴木 この番組だって、脚本や進め方があってその通りにやるんだと思ったら出ないと思うし。たいへんなんですね、

脚本や筋書きがないのは。一か八かが二時間近く続くということなので。でもそういうのじゃないと自分がやる意味もないし、ふたりが組んでやる意味もないのかなと。門脇さんのプロフィールに「好きな言葉…見切り発車、アドリブ」とか書いてありますけど、自分もそれに近いのかなと。しかし私は臆病な人間で、初めての建物って非常口がどこかのかとか全部チェックしてからじゃないときちんといれませんが。

渡辺 ちなみにここ、逃げ口はどこなんですか。

鈴木 そっちもあるしそっちもあります。仙台一番町四丁目商店街のどこにAEDがあるかと、メンテナンスはいつ受けたとかまで知っています。というのは、AEDはあるから安心なのではなく、使えるから安心なんです。使えないケースもあります。意外とバッテリーが長持ちしないんですよ。去年の12月、「SEND AI光のページェント」と忘年会・新年会の時期が重なりまして、うちのお店の周辺で救急車を何回も呼んでいます。心臓止まった人もふたりくらいいましたから。AEDを使う前に蘇生したので大丈夫だったんですけど、あつてもその建物が閉まっちゃうとありませんから。

会場A 私、ボランティアでコーヒーを持って行ったりにいるんですが、今、仮設住宅で上に立つ世話役というんですか、あまりにも違い過ぎるというか、私を受けたい感じなんです。あるところではコーヒーを持って行って「いかがですか。飲みにいらしてください」という感じで行く、わきあいあいという感じの場所もあるん

ですが、「え、何ここはこの人に遠慮しながら？」というような場所もあるんですね。誰がそういう人を選ぶのか、そこに入っている人が選ぶのか、それとも市とかが世話人の方を選ぶのか、ちよつとそのへんまではわからないんですが…。

門脇 それは都市部の仮設住宅ですか。

会場A そうですね。あまりにもびっくりしてしまつて。門脇 私が訪ねたのは田舎の方の集団避難所だったんですが、世話役の女性の方が出て、ものすごく女性のみなさん気を使っていました。「今日、仮設に入るんですけど、ここから逃れられるのがうれしいという感じが満ち満ちているんですが、劣悪な環境というだけなく、世話役の方の制圧下から逃れてプライバシーのある生活に入れるのがうれしいというのが強く伝わって来ました。ただその喜んでいる方も、世話役の方のおかげでこの避難所に何とか入ることができたというんですね。だからすごくお世話になっている。その世話役の方はかなり力を持っている方で、あれこれとみんなの世話を本当に焼いているんだと思うんですね。でもその一方でみんなは頭が上がらず、言うことを聞かなくていけない、機嫌をとらなきゃいけないという存在でもある。それは異様な雰囲気でした。

鈴木 実際、金銭とか物が飛び交う状況があるという話も何回か聞いています。なんとかの沙汰も金しだいなのか。二回や三回ではなくいろんなところで。毛布2枚プラスするために物だったり金だったりとか。震災十

日目くらいまではそういうのをけっこう見ています。金はあるけど物はないという状況が続きましたから。仙台市内中心部から沿岸部に近づけば近づくほど物がありません。金があっても意味がないんですよ、物がありませんから。門脇 その世話役の方が生まれるプロセスというのが、政治家が生まれるプロセス、我々がその人を選んでしまうプロセスなんじゃないかという話ですよ。なぜそうなるのかと。

会場A 仮設住宅に入ってしまうと約2年間ですよ。その2年間という生活は私なんかには想像できないよ。うな：アパートに自分で部屋を借りて入ったっていうのなら、やだわ、はい出ますで済むと思うんですけど、仮設住宅としてそこになつた時点であと2年間：どうなのかなと。私だったら耐えられない。まあ気ままなあれかもしれないですが。

鈴木 私は神戸の折に医療ボランティアで何ヶ月間か入り、その後も断続的に何度か行っているんですが、カウントダウンがすごかったです。仮設住宅の人たちは2年目に入つた時点からあと何ヶ月しかない、しかしどこへ行くあても全くないまま。期限の決め方もどうなのかなと。神戸の時と比べるとちよつと短いんじゃないのかなと。それから仙台の仮設住宅はあまりまだ入ってません。その一方で民間の物件を借りるためにひとりもの1DKクラスで確か6万円くらいの補助が出ます。家族だと十万円くらい出るの、不慣れた仮設住宅に行くよりはるかにそっちの方がいい。だったらなぜそんなに仮

設住宅を作っちゃうのかなと。働めるのも違う課で進めたりというのもあるのもうちよつと一元化して無駄のないようにするべきなんじゃないのかなと思います。そうした要望書も出したんですが、まだ回答が返って来ていません。

門脇 仮設住宅で権力を握るのとおなじようなシステムで政治が動いたり、戦争が起こったりするんじゃないでしょうか。仮設だからとか震災だからとかいう特殊なケースなわけではなくて、一般にそういう風になっているんですよ。普通に町内会とか、一家の中でとか。いろんなところで起こっていることが積もり積もって戦争になったりならなかったり、DVになったりする。

鈴木 ひとつのこととして、小さいことなだけで、そういうことが積もり積もってサラエボみたいになっちゃうんじゃないかなと。ユーゴの内戦、旧ソ連崩壊と今の仙台の状況がきわめて似ているというのを何度も指摘していますが、前者は今の仙台より悪くないです。今回の状況の方がはるかに根が深いんじゃないかと考えています。というのは、ユーゴやソ連の時よりも、仙台市民の心、5つの区の心が乖離し過ぎていて、はっきり言って別の市というより県も違うんじゃないか、下手すればここ日本なの？と思っちゃうくらい違う。

門脇 このような状況が悪い方向へ向かうのを避けるためには、システムが大事なんじゃないか、それとも地域を愛する心が大事なんじゃないか。

鈴木 ナシヨナリズムもあり過ぎれば「海ゆかば」みた

いになって天皇陛下万歳みたいになっちゃうし、ほどほどなんですよ。ほどほどということは今の人たちは知らない。だから「これいい」となると、ほとんど猿のなんとかみたいになっちゃうんですよ。そして駄目になっちゃうまでやっちゃうでしょう。

門脇 自分の住むまち仙台にみんな無関心だ、みんなもつと関心を持つとうよということ、みんなでゴミ拾いをするとか、草の根の取り組みがあるわけですよ。でもやっぱりなかなかみんな参加しないじゃないですか。そうするとしたい人がやるだけではなく、ある程度みんなが市民参加せざるを得ないようなシステムをつくる必要があるのでしょうか。

鈴木 それは歩き喫煙が多いから規制をかける、自転車が多いから規制をかけるというのと似ていると思います。規制をかけるほどではなくて、不文律みたいなものでいいですよ。アメリカから契約だとか規制だとか、私から見ればあまりよくないようなものが来てしまつてから、なんでもかんでもがんじがらめで：例えばゴミにプラスチック、紙とか書く必要ないんですよ。一番あきれたのは、原発臨界の時もそうだし、今回も渡した薬（※ヨウ素）があるじゃないですか。あれにもプラスチックと書かれてるんですよ。あれを飲むような状況だったらゴミ分別も何もないはずなのに、そこまでやっちゃうんですよ。なんにでも手を切る恐れがあるからとか書いてあるし。

門脇 規制で何でもやるのは私も反対なんです。自分の

まちをよくしようというのに、規則でやるとか…経済的利害を用いるのはちよつとグレーゾーンですが：本当は面白いからやるのが一番いいんですよね。でもその面白いからやるという強度が、どこまでアピール力を持てるのか。選挙に一票入れてどうなるんだぐらいの無気力感に陥る時もあるんですよね。ものすごい金をかけてキャンペーンを行ったり、大勢動員したり、中心街を丸ごとショッピングモールに入れ替えちゃったりというのが一方であつて、その一方でみんなでごみを拾いながらまちのことを知ろうとか、あんまり人の来ないアートのまちの人のコミュニケーションを多様化しようとかいうのをやっている、これ何回繰り返せばまちがよくなるのか、面白くなるのかという気持ちになることもあります。

鈴木 それよりもどうしたらこんなに簡単に諦めるような人間を減らせるのかと考える方がいいんじゃないかと思ひます。みんながみんな羽生さんを前に将棋を打っているような感じなんです。羽生さんと言ったらプロ棋士がやったってほしい負けますから。だけど羽生さんだって人間ですから、わからないじゃないですか。俺だって勝てることあるかもしれない。例えば盲腸になつちやつたとか言ったら勝ちですから。だからあまりにも簡単にすぐ諦めちゃうという考えをどうやったら変えられるのかということをやつていった方がいいかもしれません。そのためにはちよこちよこやるくらいじゃなくて劇的に変えなきゃいけないんだけど、劇的に変

えながら細かい部分もやらなきゃならなかったりとか、下手すれば何十年もかかるかもしれないです。何十年もかかって今のようなところてんみたいな脳みそしか持っていない人間が増えてしまった状況ですから。会場A 私たちが小さい頃は道徳という時間がありましたよね。きちんとこういうような、という。そういうのは小さい時からの積み重ねで、今子育てしているお母さんたちが道徳についてどういう捉え方をしているのだろうと思ひます。学校任せ、塾任せ。自分はカルチャーセンター。今教えている先生方も、二十代三十代のお若い先生だったら道徳という言葉についてどういう捉え方をしているのかなと。

門脇 結果主義というか、成果をあげた人が優秀だという世界観なんじゃないかと思うんですよね。鈴木さんが無気力な人、すぐ諦める人をなんとかしようとおつしやいました。競争して勝てないことはやめようとか、やつても何ら数字的成果があげられないようなことは無駄とか、損だとか、そういう世界観に浸されつづけた結果、すぐに諦めたり無気力になつていこうと思ひますね。ではなぜそれを無駄だとか損だと評価するのかと言へば、目標がひとつしかないんですよね。有名大学に入るとか、経済的に成功するとか。多様な目標設定が排除されている。ひとつあるいは狭い幸せしかなくて、それにとどり着けないと負けとか、不幸せになつてしまう。そんな中でみんなの目標を追わずにいられるのはよっぽどの天才か頭がおかしいかなのかもしれない。

鈴木 負け組勝ち組って、マスコミが作ったやつでしょ。フジテレビだから勝ち組、テレビ東京だから負け組というわけでもないでしょう。テレビ東京はエロもあるから逆に勝ち組だったりするかもしれないし。

門脇 その多様なゴールを用意できるか。本気でゴールだと思へるか、思わせられるかという部分が、今日の道徳にとつて重要な気がします。こういうことをしちゃ駄目だよというのだけではなく、そうした豊かさのようなものをどう伝えるのか。そこがうまくいかないと誰も「いろんなゴールがある」とか言つても納得しないでしょう。でも私自身、とてもゆらいだ気持ちになります。例えばアートをやっている、それが多様なゴールを提示するものだと一方では思つていながらも、こんなことばっかりしてて本当にいいのだろうか、時として不安や恥ずかしい気持ちになることがあります。

鈴木 道徳もそうなんです。子供たちが本当にはじけられていない。だから大学生になつてはじける必要もないのには、じけちゃつたりするのかなと。国分町から出てくる人は今ほとんどが学生です。俺から見ればただの馬鹿ですけど。だつて学生の本分って勉強のはずなのに、彼らは遊びなんです。遊びなんです。本当にことごとく遊んでいけるわけではないんです。なんでかと言えば小さい頃からとことん遊んだ経験がないから。とことん遊ぶというのはゲームとかそういうのではなくて、一心不乱に駆け回つたりおにごっこをしたりということ。親から金もらつて小学生からカラオケなんてぶざけ

んじゃないと思うんですけど。金を使えないと遊べない
& 思い込んでいる小学生が多過ぎます、仙台は。非常に
かわいそうだなと思いました。私には小学生の友人がふ
たりいます。私のゲームの師匠なんですが。金なくたつ
て遊べるじゃないですか。大人が金がないと遊べないと
いうことをあまりに見せ過ぎてしまっているのかなと。
そういうところが、こらえ性がないように見えて、がま
んさせてしまっているんじゃないかと。遊びたいのに塾
行かなきゃならないとか。門脇さんが塾やっているから
言いがらい部分もあるんですけど…。

門脇 まあ、うちの塾は癒し系ですからね。

鈴木 塾行くくらいだったら遊んでばあーつと発散し
てから予習復習をちよちよつとやった方が自分の
場合は頭に入ったなど。メリハリがないんですよ、子供
のうちから。大人のことをわかりきったような感じの子
供が多いんですけど、実はわかってません。

渡辺 子供の話を聞いていて思ったんですけど、みな
さん地域の子供とか、日本の子供とかいうことで話され
ている気がします。子供は世界中どこにでもいるじやな
いですか。日本の子供が駄目でもアフリカの某国の子供
がはじけているならいいじゃないですか。

鈴木 俺、嫌です。日本に完全に諦めちゃってるんなら
それでもいいですよ。他人がどう言おうと——国粋主
義者なのかな——やっぱ日本が好きなんでしょうね。
日本のガキなんてどうでもいいやと利他的になつてし
まったらどうなのかなと思います。諦めるなと言つてい

る自分自身がそんな簡単に投了したらよくない。自分は
子育てはしなくていい年齢になったんですが、子供の友
達が何人か来てまして、最初はゲームだったんですが、
最近は昔遊んでいた遊びなんかをやつてはじけてるの
を見ると、遊び方知らなかったのかなと。何かのかたち
でみんながもつと教えてあげれば、日本の子供は駄目じ
やないと思います。そう考えるとよその国の子供がいる
から日本の子供は駄目でいいという考えは違うように
思います。

渡辺 逆に日本の子供だけよくなればいいですか。

鈴木 自分の目の届く中だけでしか言えない部分があ
るということですよ。今の俺がグローバルなことを言つた
ら、「おまえ東北会病院に行け」とか絶対言われますよ、
精神病院のことなんですけど。もちろん世界というもの
を相手にするなら、一番近くのを大事にしなかつた
ら、世界も何もないと思います。いきなりでつかいとこ
ろに行つても難しいと思います。それほどのことを自分
は考えられない。

渡辺 もうちよつと近いところで行くと、同じ市内の子
供、石巻の子供や南三陸の子供とかあるじゃないですか。
おんなじ日本です。それで言うと、子供の何かを気遣う
というのは、その距離によって変わるものでしょうか。

鈴木 自分が常日頃見ているというのを中心に考えて
いるんですけど、見えなくなるとわからないのでわか
らないことに関しては言えないのかなという感じがし
ます。ただやはり子供というのはいくらいったとしても

私たちの2つくらい先の世代までだから、これから彼ら
の時代が来る中で、自分たちの時は本当にとことん遊べ
たのに、それを遊べないようにがらじめになつちや
つてるのは、こらえ性がないと言われている反面、がま
んを強いられているのかなと。もしかするとそういうの
があるから、昔起こらなかった事件とかも起こるのかな
と考えています。

渡辺 先ほどマクドナルドの話が出ましたよね。日本人
の若い人でラオス—インドシナ半島にある貧しい国で
すよね—そこに行つて、日本のレストランもないで
すし、現地の店しかなくて、ボランティア活動とかして
たんですけど。食べ物が悪しくなつて、何食べたいと聞いた
ら、マクドナルドのハンバーガーが食べたいと。それを
聞いて私はショックを受けたんですよ。私はご飯と味噌汁
が欲しいという感覚なんですよね。子供の頃から刷り込
まれてるわけですよ、味とか。

鈴木 実はうちの息子と娘も同じこと言いました。その
時にもすごいショックでした。そうだったのかと。俺
の教育が間違っていたのかなとかいろいろ悩んだんで
す。今から十年以上前の話なんですけど、すごいため息
が出ちゃつて、しばらくもわーんとなつちやつたんで
すよ。まさか自分の子供までそんなこと言うのかと。文化
的侵略なんて言うの大げさ過ぎるのかなとその時まで
は思っていたんですが、冗談じゃないと。そういうのつ
て、教育とかいう以前、地域の大人がわからないところ
で、看板はあるしCMはあるし、何よりお小遣いで買え

るんですもんね。本当にスタンダードになっちゃったというか。怖いなど。それ考えたらカレーもそうなのかとも思うんだけど。そうするとだんだんものが食えなくなってきたりするんですけれど。

門脇 実際、生活はもうそうなってますよね。百均、ファミレス、コンビニ、ショッピングモール…安いし便利ですし、使ってしまう。逆に使わないで生きるのは、今、不可能になってきている。その一方で地域に根ざした商店街のよさもあるわけです。同じトイレットペーパーがスーパーでは298円なのに、商店では倍くらいで売っている。それでもそつちを買う気持ちになるかどうか。

買う気持ちを起こさせるような何かがあるのかということですね。みんながピカピカのショッピングモールを目指すのではなく、そのまちそのまちの商店街なり商店街のよさを多様なゴールとして本当に提示したり、感じたりできるのかどうかということなんだと思います。では自分はどうなのかと言えば、百均で買うわけです。商店街で買うことも重要だと考えているし、よそのまちに行けば利用しますけれど、自分のまちの商店街で買うことは皆無と言ってもいいです。でも大事だと思いません。大事だと思っても行動としては違うことをする——こうした私のあり方に、戦争へ突き進んでしまつた行為は重なりませんか。

鈴木 戦争は絶対やっちゃいけないと思いますし、広島を平和公園に「安らかにお眠りください。過ちは繰り返しませんから」というのを、元自衛官ということもあり、

行かたびに絶対やっちゃいけないなと思いつながら読むんですけども、それと向こうが攻めて来た時に戦争に行かないというのはちよつと違うのかなという感じがします。自衛隊を辞める時に、万が一有事があった時にはあなた方は第一陣だからねとはつきり言われているんですけど、拒否もできるんですよ。昔とは違いますが。だけれどもおそろく向こうから先制攻撃を受けた場合、私は拒否しないで行くんじゃないかなと思います。それは家族を持っているけれども、家族だけでなく地域とか日本とかを守らないといけないなと思うとそうなのかな。それがたぶん、死ぬとわかつていても行くと思います。それがこちらから戦争だというのなら絶対反対です。

門脇 日本を守る、この地域のために、というのがすごくさん臭く聞こえて育ちました。

鈴木 それはおそろくさん臭いようなことを政府でやってたということもあるし、今もやってるんですけど、さつきも言ったように先の大戦で戦争を始めた人たちっていうのは、自分でドンパチやってないんです。やってないからできるんですよ。他人の痛みは百年がまんできるといっていいじゃないですか。

渡辺 原発もいっしょですよ。

鈴木 そうですね。

門脇 じゃあ、まちを大事にしようとかいうのもそれに似ていますかね。まちづくりとか言っても言ってるのは実際にまちづくりしてる市民じゃなくて仕掛けてるだ

けとかね。

鈴木 自分がごみ拾いをやろうと思ったのは、ただ単に自分がお世話になっているところが汚いのを嫌だということなんです。だから別にたいそうなことを考えているというわけではない。あとは教育のおかげだと思いうんですけど、汚れてたら片付ける、きれいにするといふのを小さい時から親や地域の人、先生方から教わって来ているので、ただその通りにやっているだけなんです。自分の部屋は汚れてもいいんですけど、ここ観光地じゃないですか。観光地で汚れているのは致命的だと思えます。去年の8月13日に京都から来られたお客さんに「仙台は杜の都っていうけど違うね。ごみの都仙台だね。夜から朝にかけては無法地帯仙台だね」と言われたんですよ。その言葉を聞いて、仙台生まれでもないのでなげかかーつと来ちゃって…。

門脇 まちをよくしていったり、自分のこととして捉えたりというそのきつかけが、鈴木さんの場合は売り場があるからとか、そうした固有な理由が普遍的なものとして我々一般に伝わって来る、その伝染力のようなものが求められているのか。あるいは…。

鈴木 理由なんてないと思うけどな。そこまで別に何かする必要なんてないんじゃないですか。ごみが落ちていたら拾うという基本的なことを考えていければいいんですよ。だからボランティアとか言うよりも、気づいたらみんなが拾っているというのならボランティアなんていりません。

門脇 そのある意味当然のことが行われていけば、戦争に進むこともないのかもしれないですね。

鈴木 駄目なものは駄目とはつきり言え方がいい。おかしな政治家が出てきたら国政に送らなければいいんですから。

門脇 しかし仮設住宅では現にそうでない状態が起こっており、この辺りでもごみが普通に落ちていているという状況があるわけですよ。

鈴木 先の大戦では軍人たちがわーっと思っちゃったという風に捉えられている面がありますけれど、実はそうじゃない部分がありますよ。日清・日露戦争で日本が領土を取ったり、戦時補償を得たりして味しめちゃったんですよ。それで2匹目のどじょうならぬ3匹目のどじょうを狙って満州国を作ったりなんて、軍部だけでできないですよ。そこに経済界があったり、国民のみんなもつかれたんですよ。あれはだから一部の軍人だとかA級戦犯ばかりじゃなくて、国民の9割くらいは戦争に進んじやったんだと。勝っているうちに終わっていればよかったですけど——だから早期講和論を出した人もいっぱいいたんです——勝ってるうちで止められないんですよ。ギャンブルもそうですけど。門脇 それで負けたのがよかったですけれど…。

鈴木 よかったかどうかはわかりませんよ。前回は日本の敗戦で終わりました。今度戦争が起こったら敗戦では済まないです。おそらく地球に生物が住めなくらいになっちゃうかもしれません。

門脇 ということで、そろそろ時間となってまいりました。また次にこの議論をつづけていきたいと思えます。

今日は特別ゲストの渡辺さん、ありがとうございます。渡辺 いいですか、最後に一言。さっき南相馬に行って帰って来たんですが、仙台の人たちに伝えてくださいと言われたことがあります。今思い出したんですけど。南相馬はご存知の通り原発の影響でたいへんな状況になっていきます。実は今まで当たり前のように仙台が一番自分たちの生活にとって近いところという感覚で来たが、今回それを改めて感じたと。通勤通学していた人も今は仙台に下宿していたり、放送などもラジオ福島ではなくて東北放送ですか、そっちを聞いていたというんです。震災が起きて仕方なく福島の情報としてはラジオ福島の方が福島の情報を詳しく把握できるのでそっちを聞くようになったそうですが、南相馬の人にとって仙台というのはそういう場所だということを仙台の人に伝えてくださいとのことでした。

門脇 これについては次回しっかりと議論していかないとけませんね。外の目も入ってくることで震災と反戦、そして仙台という場がいかに語られていくべきなのか、浮き彫りになって来ているように思います。今日はみなさん、どうもありがとうございました。